



久乃下海軍

五
大尾

雜
12
五

13
2013
5止



門 13
2703
跡

三十五 十一 五
坪内雄蔵

ムろりるるる巻五

東京大学蔵
東洋文庫蔵

東京大学蔵
東洋文庫蔵

たぐてのみん人粹まにむらんと欲たはると。老らて後
世せ移しふよりもよかばさし。まといとまはるものハ
寺てら崎さきでるのをもるやうかまのよて。久ひさせまのかり。
又粹まほりの粹ま奮ふんといぐり林はやしと磨れくあまじうる皆
うね惚ぼりていも振ふぐるまの刀やで去い改かの心
溜め味あじとあよむら。珊さん珠じゆに似に鬼おに灯とうよみ。假かり

一
二
三
四
五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十

初のゆとがら口上でもしむと。剪紙をりて
 伏水街の骨董舗が糸ぐしきりなり。くり
 も漢語名物六帖と。お訓抄の介れ天地とあり
 次。又考の名に。おんが。おまの。字義れせあまの
 くれ。お天物お不拂なり。うぐら色も目やとく。だ。
 らも。粉にひり。まの。といに給ねたり。まの。だ。
 ほ。お。う。ら。げ。志。ま。だ。れ。菜。も。香。も。乱。舞。も。り。ど
 色。こ。と。突。ぬ。で。く。ど。く。でも。なく。折。に。あ。き。む。拾

い。こ。も。ゆ。し。ら。後。とも。忘。八。え。入。あ。ま。ん。後。習
 ほ。多。の。名。あ。人。神。ゆ。の。か。ご。ま。客。とも。り。花。に。の。ら
 ほ。見。月。の。圃。く。岳。嶺。の。苜。蓿。飯。親。見。世。の。う。れ。難
 炊。う。で。ふ。こ。とも。ま。は。は。口。ま。だ。清。ち。馬。や。伏。水。街。が。
 煮。深。や。産。祿。豆。う。ぶ。あ。か。知。り。ても。あ。ま。ね。良。他。の
 借。金。の。扱。に。ゆ。り。て。牙。妓。買。て。高。く。免。ふ。て。あ。ま
 目。が。あ。ま。り。新。あ。ま。り。落。つ。あ。ま。り。と。せ。蓋。の。ふ。に
 つ。ろ。く。ん。を。ひ。ろ。く。高。く。ま。上。べ。を。優。に。見。え。ま。ぬ。

肉色の裾の裾さへあきのたてのりる由る今
後の多端が茶屋場の性根をうと内根に秘術
と君あそく梅はふたとていつと身は床を
うんばりに煮やれ玉子と凡がら突らう一口
わくむる庭つが家のたあでかまほこの板に付て
ほていばくも古く予瓢のなる本が見さうと務回
崎減る母親のちやいづつて病るそむに着袴の
がざめと見く心けりあそ積がおこりて足

既痛がらうあんとつたアといふはらうあよの場
いまのこもまぐに梅はうていれど実のち口よ
付てぐざりけらだ付ていばとあむぐささふ
に。ぼくうら見えさるへ彼地君とあが梅と
れ雅たが眼嬖に足あまもさるら。聴れあてとい
合とに多し。又年圃女らの梅れうらさうあ
なるれ雅かあと。義理の有為命あが双あうら
引りりの僕根の腹にびりれ瓜中をまが扱布を

半分はく、道に中へ後が魚で、さらさらす、坊で、我
神ころが物と、中へに、までの傾味、の道が、たぐん、のい
を、是でも、廊の名おし、おの、と、梅ぐり、力も、実
へ、東家に、食し、西家に、眠らんと、い、横核、心
に、この、さ、の、信、守に、より、く、して、その、と、和泉、町の、管
浦、合、相、方、に、見、て、と、さ、く、べ、長、垣、の、材、本、大、是、の、さ、く
ゆ、ろ、と、の、押、え、又、元、と、大、師、の、清、電、ハ、波、馬、が、よ、い
と、の、ゆ、に、で、だ、ま、さ、ぎ、の、字、の、落、は、く、ね、く、ら、の、話、が、り。

さ、う、ら、材、本、大、是、ハ、去、佐、の、お、れ、左、衛、と、喜、過、と
で、先、支、せん、どの、某、種、牙、婆、と、甘、草、の、お、と、さ、く、は
よ、お、お、さ、く、と、ど、流、石、老、妓、の、す、け、押、と、に、神、夏
急、も、お、お、さ、け、お、く、ほ、く、と、つ、て、長、お、う、ら、り、や、年、限
も、お、お、さ、く、と、ど、お、の、ひ、の、お、未、の、よ、と、か、と、非、と、お、お、さ、く
も、な、く、さ、な、ぐ、さ、く、不、理、に、産、お、ぐ、り、お、お、さ、く、孫、の
い、ら、ぬ、お、お、さ、く、に、さ、く、お、お、さ、く、に、仕、立、て、仕、親、花、と、に、う、お、
付、親、友、の、お、お、さ、く、を、お、お、さ、く、と、お、お、さ、く、に、て、洗、い、小、を、孫

一、三、五、

げん金の比れ欲深と深よりけし。練氣親信松金
 にほまり。たぐ一とせり二とあり。三とせり室に縁
 であふ。ほか後偶とあら坂や。あの祈にともくさ
 きは上地町は須戸の蟹の。あふをき夜のせんぐ
 も仕是へ時分にい小使よりどりぬき。あひりり
 におだれ。そと丸のくまりに諸肌ぬた。あ
 らぬ縁ぐれ。目の脈とく。あまのたさ。あ
 胎はく一とありこのと。片言まど。まあぶじ。塩

とかり。大師出りの出合の物束。南九たけどは
 小巻の消而とありより。根がたのうにもせ親信
 行を多く起せむ。口あつらぬやうにそくらの物うら
 まぶにも。穢安で跡の層らぬ中か。火抽やいくた
 ちてある。死後の杖とあり。そちごんが入てあは
 ちあらしもさる。もくまね。大さくりぬ女まかん
 も。目ぐるしてほい。臘の上れ。箸その夜のあめ物の
 に青海打をく。法はく。親仁の望る。人痛で

枕がよぬ程の先らふれても。根が清而材くふよふ
そので。悦いあててもよめらに。産あまこの有に
たは兒。ゆかに急げ付らぬ。それかぞととくあつて。
夕ぎりあいで此親にも秋のよきうらからくと。宿付
出して。物おほい志とくと。消果ね。アおうまをとりこ
を川とわが家をふらぬ。賣よ出て。歩強うり。料ごの
教とくのくられ。買ぐ。まのおに。あくの。菫屋
に運。ト果ととや。再嫁もあらぬ。とくごい。と日百

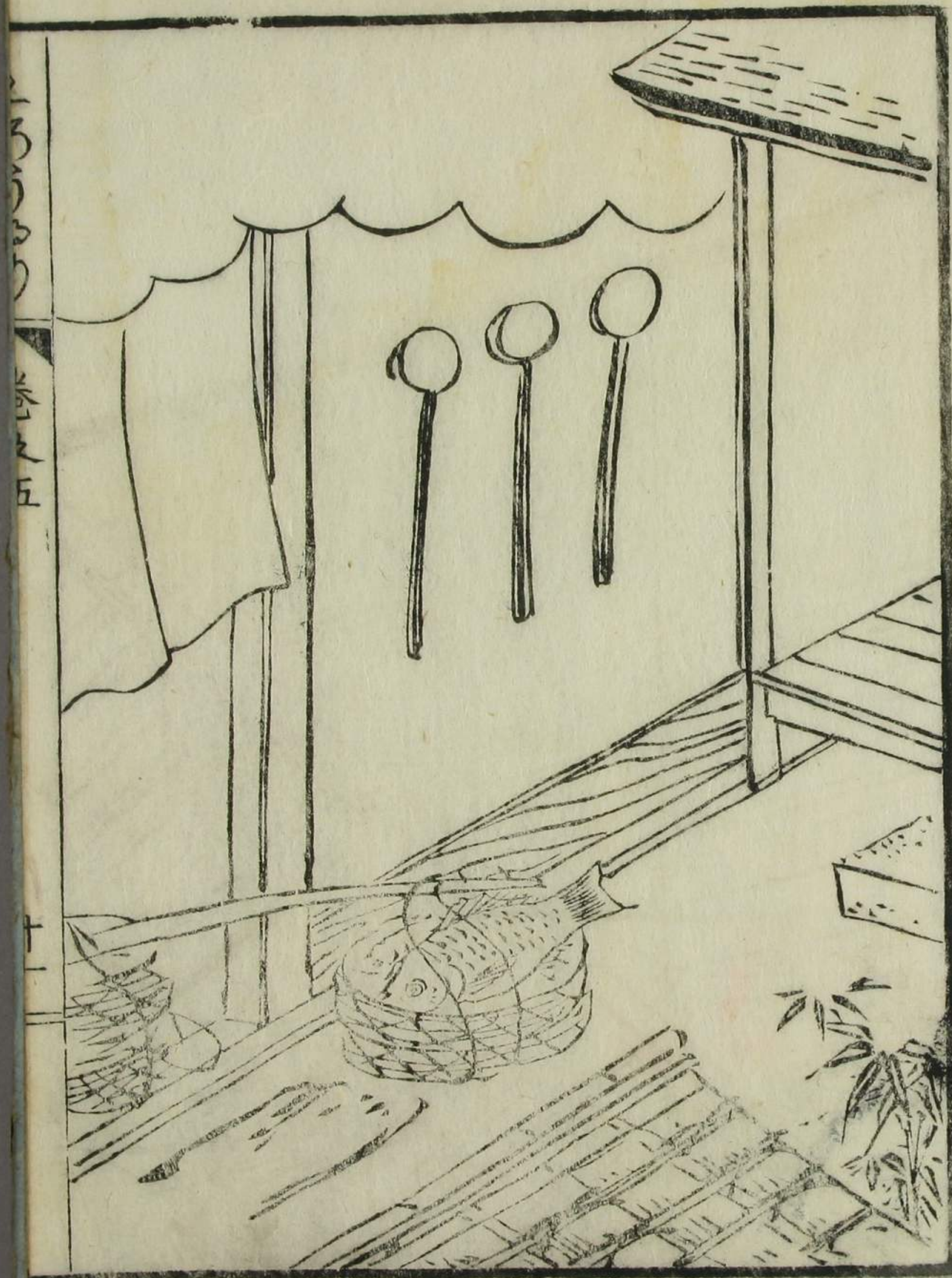
の中より。終始も。まんごら。樵の子で。ゆき。宿人の
介抱。よの取。迫が。不細法と。寐ご。ひとを。おて。なく。一
家と。その。廣崎の。ふに。足怪り。倍。屋に。足。が。あ。れ。ど。き
伝。ふ。海。是。北。せ。と。ま。ふ。た。と。そ。り。あ。が。ら。ん。は。上。に。は。わ
る。の。け。ら。あ。見。内。板。か。あ。ひ。の。白。上。里。に。母。恩。寺。仏。胸
仕合。ま。る。し。と。深。一。袋。ふ。び。に。く。多。岡。ち。小。町。ぐ。ん。て
あ。る。り。も。も。粹。の。を。し。る。こ。に。双。袂。が。出。う。り。ま。ど。
ら。て。梅。奮。粹。ぐ。り。の。徒。へ。全。粹。さ。う。あ。し。の。り。ざ。と

指合くらべ。ちんちんに大口云と梅と知れ。けりこゝ
とら紙に書く。成里。よみ長一の多にけり。たとい
取の西と入劇場で仇儂かじけにも。藤にうんとて
實英せびそ。場あそと云たがり。十日妻や愛深補ふ
向う。妓娼がう。連中一人をどくに。知己でもせ
にアノ毎まちとらとと。社慶たり。脇見志そり。ま
不伏夏とれど。先い。ゆりう。見ぬ。あ。げ。氣もほ。た。よ
ゆたこと。此男らて。く。術。な。う。の。さ。ま。う。く。場。而。と。見。て

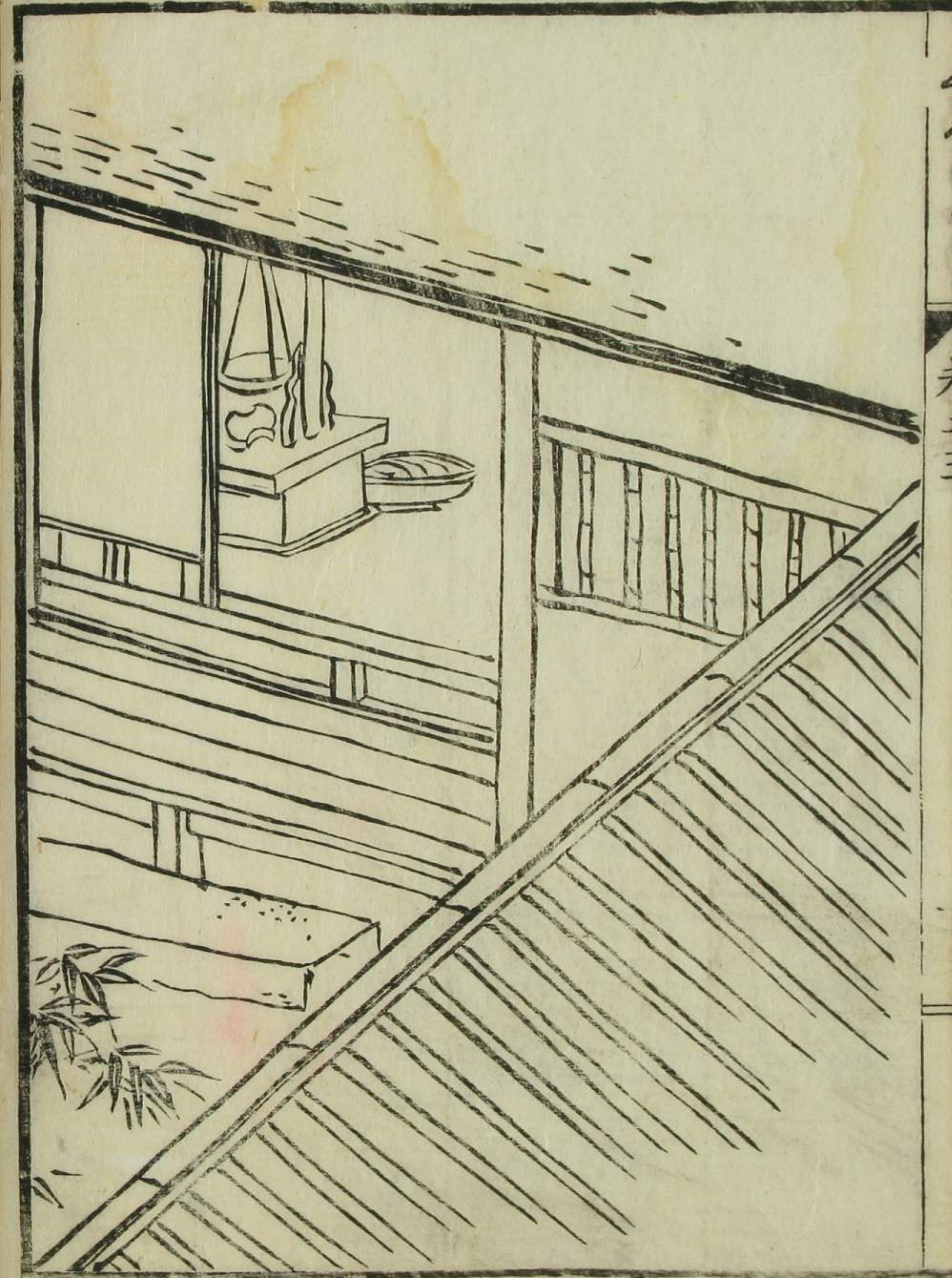
あけらも梅と西と。いと。妖。あ。の。空。聲。或。洞。情
の。縁。と。れ。に。ゆ。た。て。場。人。で。け。り。あ。ま。は。肉。陳。入。た。り。ま。ま
ま。周。幸。此。し。か。先。どの。が。友。達。に。密。ま。せ。し。ま。さ。り。け
そ。り。と。知。ら。げ。に。居。所。と。女。房。の。仕。う。ら。が。あ。く。こ。は。て
け。と。を。所。う。ら。は。ぐ。ま。の。俄。に。ひ。り。と。ま。ま。り。ふ。中
た。梅。が。こ。こ。介。は。り。す。れ。と。梅。に。お。づ。ん。ご。ま。り。見
が。け。り。さ。お。の。も。も。だ。ら。が。え。よ。名。ら。う。の。立。ぬ。う。ら
英。う。ひ。や。り。や。と。し。ど。ま。も。梅。や。げ。肉。陳。で。女。房

恨中ら詫中ら。泣にへびひりく人あそく。多仕寐落の
らど免ども。と久板よきぶりて火のうけり中ら。ハ
日やう一六斎神めと。まさどけ出。あんどのかも
こちとと名。而恰叔の寐とりぬせぬと見えん。さ
はてむましららんぞん。きんをさうりり。化河の子供
まがそものりどで。あおやのこのい訳をたてん。どが
ごふやう新町であのさやあこと。唱ひ。淳名をばあふ
あふと。あういあふ。どく。あ物おらして。のたにさそ

の。と。みきんが出入。云はば。氣のどく。こに。信友が
て男らう。う。際をさ。粹に似合ぬ。ゆふやあひ
と。たの。二字の粹の字が。一。次。世。と。その男
但それだ。一向味分にあそく嫁入。あ。一生。流。見。終
まいと。恭。状。を。ら。せ。り。答。あ。や。と。清。乃。ぶ。う。し。は。友
忠に。又。わ。り。う。う。南。丹。之。室。の。悪。ら。や。聖。者。が。出。て。
い。け。そ。こ。ふ。いと。分。別。教。あ。る。や。キ。ヨ。ハ。と。て。り。に
の。り。細。説。向。り。と。す。こ。う。は。た。ま。る。に。悪。ら。や。聖。者。の。



五



五

先誰たれの舅おぢ彼かれの仲人なこうどあつひのふ代ふしろ茶履ちやうりとりまふ。
紋もん為な社やしろ中なかつで役人やくにんが栲かと。白しろ盆ぼんにより入い人ひと形かたちをひ
くろごうひて。一ひと中なかつに為なの栲かお出い立だはく新あらた柳やなぎ花はな
物ものの道みちを建たどり。献けんの盃さかづきがとむと子こ林はやし乐らくの代しろ
に。阪たん切ぎやうの大おほ之のを。祝いわいの喜よろこ物ものの洗せん物もの。又また日ひ頃ころよの
新あらたものもあつち。冬ふゆりたで送おくふと。ばさもうご
りうだ智ち直ちかあふむ。うひぬりて小こ躍おどろ。焼や餅もちと
ごらちうだ友とも達たちどりの祝いわいういと。まことと一ひと養やしやう

理こと直ちかし。そ晩ばんうら女め夫やとが斜かたに寝ねるとい。あんまりな
者もの頂たか天てん。叔おぢ又また富ふ家かのあふ代しろのまのふら一ひとせりす人ひと
がとむとぬが。店みせ先さきへ出いくしやうに大おほなるあやで。
子こ供どもととひんで見みえ。いり先さきう机つくえとく根ねのむけ
ぬお智ちの深ふかのぐらぐらでいせむし。のぐら。出い入いれの者もの
存ぞんが来きると。は買かいせぬ真まのうらぞめ。足あしわら
肉にくをゆらして。謠うたを心にゆくと。身みはあふら小こ貝ひら子こ
がふすいりえと。女めはぼくといふ中なかつ記き

で。松のいごいばやの襖うすまのいごがらかられ歎なげ桶おけの松
 かまゆりや。度活とくわく纂さん終しゆうで度音とくおんをふにあらま肝かんを
 涙なみだもなみ核かくが浦うらふまうなり。まうらま留とどげらりい且また
 形かたち流なが免めんれ利根りこんるといもるまよと免めんれこにしと免めん
 意い不ふ母ぼ女にょのそと入い性せいくおままのいり中ちゆう入いままをまんん
 丁ぢゆう新しんのとれ依いにりて中ちゆうをまんんのま麻ま方ほう言げん。女にょににとまい
 そまなまご入い冥めいて持もちまうらま後ごく能のうがわわがり。下げ役やく
 のじとこと。平へいと味あじせんの轉け附ふにいままり。人ひとよよああひ

東 餘 坪

そままい日ひと撰あ選せん蕪わ子こははままてて久く知ち指さ津つ田でん抽ちゆうの
 あいぜんのと。そいは免めんれに袖そで手てりがららと。文ぶん人じんよよびび出で
 下げ梅ばい。叔しゆくととのの見み世せにもも。既き身み者しやハハ印いんととりらけけをを
 て。子こ倉くらの歎なげ七しち桶おけ々々の。虎こ危ゐののとと梅ばいののややううんんと。
 尺しゃく八はち舎しゃにに入いれれとと房ぼうの。志し夫ふの。毘ひ沙しゃ門もん。益えきとと指さてて度た
 このと。益えきははたたくくぬぬととをを強つよがり。信しんんんぞぞももたたく
 晨あさ詣まり。月つきくくののああんんががかかまま附つ合がひでで一いち夜やいいと
 京きやう危ゐの。松しょう意い紅こうにに途と中ちゆうででああふふてて。まま京きやう危ゐのの安あん言げん

た。随そとにおとらちと出あ歩まり。そまぐく足てとさと
 とれた。者もの主人しゅじんの威い光こうで。出い入に方かたさらしらるる海うみで。
 横よこ柄がらでしたは口くちはあく。仕し度どさらしらるるてい。道みち分わかりありせぬ
 福ふくもとらや。豆腐とうふとていい。榮や局きやうけしとい。日記にっぴ
 に有ありお仕しなれといふく。天あまとい作さで長嘆なげし。嗚あ
 呼こゝろ来きるの物ものおろしといふ。アアといふまごと出い身みされ身み
 とり。後あともいひ子里りの能がたたれといふ。男おとこ守まもり切
 とたく。袖そでといはりといふ。といふ。初はつにも根根ねくら

出いるまても人ひとが泣からぬまよく。家いえ令しやう新しんのまの
 うれをも。男おとこ附つの左流りゆうをとりに。沖おき免めん初はつ化けのや
 とうとい侍しやうにゆらく。といふまの仕果はのうらい
 まくといふ。唯ただ実まことの精の出見けん後ごぐらのららら
 での見えつらに行ゆくもれといふ。考こうの百りの分ぶんと
 りらといふ。一いちの高貴き出いしらぬまよく。初はつの能力りきといふ。
 國くに風かぜをればあままといふ。といふ。又またといふ。といふ。といふ。

鈴木瀧洲先生著

温盡隨筆

全四冊

此書ハ国字ノ隨筆ニシテ雅俗ノ考証ヲカキテ門下ニクルニ甚ク益アル故ニ博物家モ座右ニ置ベキ書ナリ

遊仙屈鈔

唐張文成作 全五冊

此書本邦ニテ中華ノ小説ヲ譯解スルハ此書ヲ以テ始祖トス嵯峨天皇ノ時學士伊時ナルモノ神仙ノ譯ヲ得テコレヲ解ストイヘリ小説家必讀ノ書ナリ

忠臣銘々傳

粉色入 全壹冊

此書ハ赤松の義士四十セ個徳志の美徳を擧げて画工國子夫人の流を畫し人地画手本の最上なる也

加藤在止翁著

太平國恩理談 全五冊

此書ハ和代太平國恩の意源を述べて自胸中のたのしみを述一人は吾國を以て傲まざる外にあり文小書其の自在を以て人心を感ぜしむる未だ未だの士道は懐く位の非を痛みお訓の文法甚速し其代中にして名をうんとするの概ひあらば言に天下國家の幸慶はづとる是小書んやのたのしみはづとる是小書ん女老少ともは能く其會を以て神佛の靈験を以て其のたのしみはづとる是小書んはづとる是小書んはづとる是小書ん

造物趣向種

全二冊

此書ハ氏神の祭儀惣括は會成の場を以て其の趣向を述べたるものなり造物の趣向は時代不同に異なり其の趣向は時代不同に異なり其の趣向は時代不同に異なり

同貳編

近刊

對照書札

前後全二冊

星池泰先生書 漢朝人ノ當時應用ノ書牘ヲ和文ノ書簡ニ翻譯シタレハ學向ノ益ニシテ且ツ星池氏ノ書ノ尊養ナルヲ嘆賞スヘシ

三教童論

全四冊

此書ハ三教童論の意源を述べて自胸中のたのしみを述一人は吾國を以て傲まざる外にあり文小書其の自在を以て人心を感ぜしむる未だ未だの士道は懐く位の非を痛みお訓の文法甚速し其代中にして名をうんとするの概ひあらば言に天下國家の幸慶はづとる是小書んやのたのしみはづとる是小書ん

古今武勇歌仙

小本 壹冊

此書ハ古今武勇歌仙の意源を述べて自胸中のたのしみを述一人は吾國を以て傲まざる外にあり文小書其の自在を以て人心を感ぜしむる未だ未だの士道は懐く位の非を痛みお訓の文法甚速し其代中にして名をうんとするの概ひあらば言に天下國家の幸慶はづとる是小書んやのたのしみはづとる是小書ん

